

会 議 記 録

次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第2回瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン懇談会
開催日時	令和6年1月22日(月) 14時～15時30分
開催場所	高松市役所(防災合同庁舎)3階 301会議室
議 題	(1) 第2期瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン素案 (2) 今後のスケジュール (3) その他
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	長山会長、有澤委員、笠井委員、加藤委員、金江委員、鐘江委員、香西委員、竹上委員、土井委員、永森委員、英委員、藤本委員、星野委員
傍 聴 者	1 人 (定員 3 人)
報道機関	3 人
担当課及び 連絡先	政策課(087-839-2135)

会議経過及び会議結果

会議の概要は、次のとおり

議題(1) 第2期瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン素案

議題(1) 第2期瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン素案について、事務局から説明した。

【事務局から説明(資料1～19ページ)】

(委員A)

令和10年度の出生数目標値に実効性はあるのか。少子化対策は、国レベルでの抜本的な施策等が必要で、自治体が状況を変えるのは難しい。それよりも、高齢者の健康寿命延伸のほうが、実効性があり、成果も比較的早期に現れるのではないか。

(事務局)

各市町で人口増減の傾向が異なり、達成がかなり厳しいところもある。しかし、今後若年世代を増やそうという中では、現実的に想定できる範囲で、目標を高く持つ必要がある。

また、圏域全体で高齢化が進む中で、平均寿命と健康寿命の差をできるだけ小さくする取組にも、もっと積極的に取り組んでいく必要があると考えている。

(委員B)

全体的な目標値について。理想となる数字を掲げていくのはもちろんだが、この先の厳しい状況を見た方がいい。達成が難しいかもしれない理想よりも、現実を踏まえた目標を設定した方がいいのではないか。

(事務局)

第1期ビジョン、及び同時期に策定した総合計画では、人口が減少傾向になっても何とか持続可能なまちづくりができるようにという視点を持っていた。また、同時期に創生総合戦略も策定したが、それもいかに人口減少を抑制するか、人口減少下でどのような対策を打つかという方向性の計画であった。国レベルでの施策がなければ人口を飛躍的に増やすことは無理だと考えている。そのため、定住人口だけではなく、高松市から圏域内の他市町を訪れる人の流れも含めて、交流人口や関係人口を増やそうという視点で、目標を設定している。

(委員 C)

ビジョンは誰に向けて作られているのか。今後人口減少が深刻化し、若者も市外に出たとしても戻ってほしい、まちの魅力を高めようということぐらいは、既に分かっていることだが、それをあえて市民に伝えることを目的にしているのか。

(事務局)

圏域住民の方に対して、基本構想に示す圏域づくりの方向性と具体的な取組について、周知していきたいと考えている。ビジョン策定にあたって実施したアンケートでは、圏域の取組をご存じない方も多かったため、周知しながら、市民と一緒に取り組んでいきたい。

(委員 D)

国でもローカルスタートアップを応援しようという流れがあり、圏域内にも頑張っている人がいる。そのような若い人も一緒に、まちのビジョンを語れるとよいと思う。若い世代に投資するという考え方で取組を検討してほしい。

(事務局)

若い世代が働ける環境づくりは、高松市においても重要である。県全体の大学進学者のうち、83%は県外、特に関西と東京圏に転出し、そこでそのまま就職するケースも多い。大都市圏にあって高松市や香川県にない業種も含めた企業誘致が必要である。しかし、企業誘致は最終的には競争になるため、なかなか連携が進まないのが現状である。

また、香川県は日本で最も面積が狭い県であり、これまでの支店経済的な地域特性についても、支店が統合されて減少しつつあり、マーケットとしての四国の必要性についての経済界の議論も耳にすることがある。そのような中では、スタートアップや企業の研究開発部門を誘致し、地域企業の課題解決やイノベーションの創出に力を入れていきたい。

(会長)

令和4年と令和5年は、全国的に出生数が少ないが、これは異常値である可能性もあり、現時点で目標値を引き下げるのは時期尚早ということかと思うが、マスコミや研究者等からは、異常値でない可能性もあると言われている。しかし、最上位計画である総合計画との整合性や、将来に向けて頑張るための明るい見通しとして、目標値を少し高めに設定している。その他の目標値も意欲的に設定されているが、あまりにも現実と乖離するのは望ましくないが、今回のビジョン案では、やや野心的に、従来の推計ベースで設定したいということである。

(委員 E)

高齢化が進む中で、公共交通は、特に高松市から少し離れた地域で重要になると考えられるため、交通インフラについては、市民も巻き込んで真剣に考えなければならないのではないかと。

行政も、資金面で支援するだけでなく、市民とともに、今後どう交通インフラを維持するかを議論する必要がある。

(事務局)

資料の 7 ページに通勤通学の状況を掲載しているが、JR や琴電を利用している人も多い。ここを現状維持しながら、そこから先のラストワンマイルを各市町でどこまで維持し、さらに新たな交通手段を構築するかは、しっかり検討していく必要があると考えている。

また、公共交通空白地帯についても、中枢都市の高松で新しい仕掛けを考えつつ、圏域全体で移動手段を確保できるように検討したい。

(会長)

高松市では民間の公共交通機関が発達しているが、他地域はほぼコミュニティバスで、ラストワンマイルをどうつなぐかという点でお金がかかり、小さな市町には辛いところである。

民間も路線維持で苦しんでいるが、公共交通がなくなると、定住人口も維持できない。公共交通の整備計画は各市町が持っていると思われるが、圏域全体が連結しているので、ここで議論すべきというご意見には一理ある。

(委員 F)

選ばれる圏域づくり、持続可能な圏域づくりに関して、もし市民側から連携の申し出があれば、どのような手順で実現できるのか。

(事務局)

既に各市町で企業や市民活動団体等との連携が行われている。さらに圏域を超えて連携したい場合は、行政側で情報を共有し、広域に取組を広げていきたい。

(委員 G)

当懇談会には様々な団体から代表の方が出席しているが、キャッチフレーズはみんなで共有したいため、「しま、まち、さと」に込められた思いを、簡単にわかりやすく説明していただければ、より納得感が増すと思う。

(事務局)

まず、次年度から始まる総合計画の目指すべき都市像「人がつどい 未来に躍動する 世界都市・高松」についてご説明したい。ここには、瀬戸内海との深いつながりの中で発展してきたまちの魅力を、今後も十分に活用しながら、発展させていきたいという思いを込めている。

魅力のあるまちには人が集まり、人が集まると多様な人とのつながりの中で、さまざまなイノベーションが生まれる。すると産業も創出され、経済が活性化する。経済が活性化すると元気なまちになる。元気なまちには、また人が集まってくる。このような好循環が繰り返されるようになる。

元気なまちに住む人は、ウェルビーイングや幸せを感じ、そのまちに対するシビックプライド、誇りと愛着を持つ。高松市はそのようなまちを目指している。

同様に、計画期間を同じくし、高松市を中枢都市とする圏域のビジョンでも、圏域の地域性を「しま、まち、さと」で表し、それらがしっかりとつながり、未来に躍動していくイメージを描いている。住民に加えて、交流人口や関係人口も幸せを感じ、この圏域が好きで、訪れたい、住んでみたい、住み続けたいと考えるような圏域を目指したいという思いを込めて、このような将来像としている。

(委員 H)

「香川県への再来訪意向割合」が「主な観光施設等利用者数」に変わったのはなぜか。

(事務局)

主な観光施設の利用者数に変えたのは、主観ではなく、実際の人数で捉えてみようと考えたことが理由である。値は各市町の主な公共の観光施設の利用者数である。

(会長)

主な観光施設の利用者数は、再来訪意向よりも客観的でよいと思われるが、施設利用者数と入込客数のどちらを使うかは、政策目標との間での問題となる。

最後に、素案の内容については、事務局の提案内容で異議なしとしてよろしいか。

(一同)

異議なし

議題（２）今後のスケジュールについて

今後のスケジュールについて、事務局から説明した。

【事務局から説明（資料 20 ページ）】

(会長)

それでは、会を終了させていただく。本日はありがとうございました。

以上